

伊藤外科ニュース



83号

2011. 4 発行

今回の震災によせて

原稿の前半を書いている今日は、あの大地震から丁度1週間後です。皆さん、様々な思いでこの間を過ごされた事と思います。昨日、やっと仙台の叔母と電話連絡ができました。家族全員が無事であったことを疲れ切った声で伝えてくれました。

仙台の叔母には、私が小学校の頃の夏休みによくお世話になり、いつも広瀬川で年の近い従兄弟たちと水遊びをした記憶が鮮明に残っています。他の被災者の皆さんの健康は勿論ですが、叔母たちにも元気でいてほしいと切望しています。

本来でしたら、春らしい話題の出る時期ですが、今回はやはりこの地震の被害の重大さを考えるとなかなか楽しい話題を提供できずにいます。しかし、NHKは別にしても、民放は春休みに入る子供たちのためにも夢のある楽しい番組も放送してほしいと個人的には思います。

さて、東京では、計画停電が実施され、また節電が奨励されています。考えてみれば、私はスイッチを押せば電気やガスが使える、水道水は無尽蔵にある事が当たり前のような生活をしてきたものです。自分の恵まれた環境に改めて感謝しなければと考えさせられます。

咳と風邪について

最近、「先生、風邪が2週間も治らず咳がひどくて眠れないです」と言って診察室に入って来る患者さんがしばしばいらっしゃいます。熱があれば早く受診されたことでしょうか、仕事も忙しく医療機関を受診せず風邪薬を飲んでいたようです。

いわゆる風邪は基本的にウイルスによる病気で、無理をしなければ数日で改善します。「風邪は数日の病気です」が私の決まり文句です。

一方、慢性の咳はその原因が、鼻炎による鼻汁の喉への刺激、喘息、アレルギー性の病気、胃酸の逆流など様々です。また、高熱や微熱でも長期にわたる場合、寝汗、全身倦怠が強い場合などは医師を受診して下さい。特に、高齢者の方や持病のある方は早めの受診をお勧めします。緊急入院が必要である肺炎や、一年に数名の結核患者さんも発見されます。

喫煙者では、風邪症状で受診し胸部レントゲン検査で肺気腫や早期肺がんは見つかる場合があります。咳に感謝しましょうと患者さんに伝える事もありました。

さて、3月の下旬は東京でも寒さが厳しく、インフルエンザの患者さんがまた来院され始めました。本来であれば、私が一番好きな桜の季節となる頃ですが、東北の被災者の方々は、暖房器具も乏しく温かいお風呂にも入れずに忍耐生活を送られていると思います。月並ですが、心を込めて「お大事にお過ごしください」と思います。

(院長)





今回の一冊

雨の中の、らくだ

立川志らく著

いつかはどっぷりとハマってみたいと思いつつ、なかなかその領域に足を踏み入れるに至らないもの、というのがある。ワタクシの場合、そのひとつが「落語」。国内線に乗れば機内放送で必ず落語を聴くが、寄席に行くまでには至らない。未だ「機、熟さず」ということだろう。

三弓はけっこう落語が好きだったようである。たいして詳しくはとも思えないが、「ウィット」や「ユーモア」といった、平成の世では死語になりつつあるセンスをこよなく愛した昭和1ヶタ生まれが「落語が好き」というのは合点がいくところだろう。

「談志とは、毒舌同士、気が合ったんだ」——三弓との会話に幾度か「談志」が登場したことがある。ハイ、彼の立川談志師匠である。こりゃまた、飲み屋で一度、隣り合わせになったぐらいだろう相手をさも昵懇の仲のようにいうもんだ、と高をくくっていたら、町場の小さな伊藤外科の50周年(2009年)に談志師匠が駆けつけてくださったので、泡を食った。師匠が「気が合う」と思っていたかどうかは知らないが、好々爺とはまったく縁遠いふたりの掛け合い漫談もどきの会話からは、三弓が師匠を充分鼻真にしていたのが垣間見れた。

と、すっかり前置きが長くなりましたが、今回の一冊は談志師匠の弟子・立川志らくが記し『雨の中の、らくだ』(太田出版刊)。内容の説明を帯からいただいちゃうと、「志らくによる談志——落語をめぐる壮絶な師弟の物語」。落語界も、落語もほとんど知らずに、おもしろく読めるだろうか……と思いつつページを開いたけれど、大丈夫。なんせ、文章のテンポがいい。もちろん黙読しているわけだが、頭のなかで読み上げている己の声が、時々、落語調になっていて、思わず笑った。

内容についての解説ができるような下知識がないので、ここではワタクシが「へえ～、なるほど」と思った一節を拾っておこう。

談志曰く「落語とは人間の業の肯定」。人間は弱いもの、情けないものというのを、良い悪いではなく、そういうものだと思える。それが落語なのです。落語は駄目な、つまりは逃げた人間の人生を描いているのです。一方で、芝居や映画は勧善懲悪。だから落語を映画にしたって成立するはずがない。

本書タイトルにある「らくだ」はもちろん、落語の有名な演目のひとつだが、「雨の中のらくだ」とは、落語に命をかけて闘い続けてきた談志師匠その人であり、師匠に惚れ抜いた弟子だからこそ垣間見えてしまった立川談志の姿である。三弓の枕元にあった「立川談志ひとり会 落語CD全集」から、今夜は「らくだ」でも聴いてみようか。

(一弓)